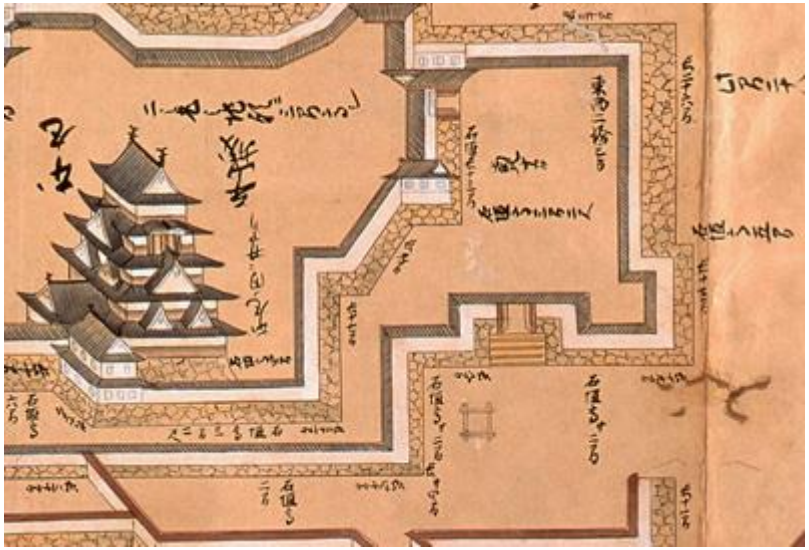
調査コラム～史料調査の現場から　第 28 回

松江城・水の手門の不思議

城には不思議な話がつきものである。調査コラム第 24 回では、「松江城にまつわる“怪異な伝説”」を紹介したが、“水の手門の不思議”をご存じだろうか。

1．正保城絵図に描かれた不思議な「水の手門」

「水の手門」は、松江城本丸に至る御門の一つで、「馬洗池」と呼ばれる池（水の手）の横に設けられた。建物部分や周囲の塀などは天守以外の城郭施設として明治 8 年（1875）頃に取り払われたと思われ、現在は石垣のみが残る。城郭施設として、本丸へは大手側からが最も重要な登城道であったが、北惣門橋→北惣門→ギリギリ門（馬洗池横）を通り、水の手門から本丸へ通じる道も重要な登城道であった。現在の水の手門跡を通る道は、馬洗池横から石階段を上り、右手（北向）に折れて水の手門跡を通り、さらに左手（西向）に折れて、腰曲輪を通り本丸に入る。



【写真 1】「出雲国松江城絵図（正保城絵図）」に描かれた天守と「水の手門」

しかし、かねてより知られるように、正保城絵図の一つである「出雲国松江城絵図」（国立公文書館蔵）に描かれている「水の手門」【写真 1】は、何故か現在とは異なっている【写真 2】。

【写真 2】現在の「水の手門」跡周辺

では、「正保城絵図」とはどのようなものなのだろうか。正保元年（1644）、将軍徳川家光の命で全国一斉の本格的な国絵図事業が開始されたが、正保国絵図事業の特徴は、将軍と幕府の威信を諸大名に示し、領国や居城は将軍からの預かりものであることを知らしめることにあり、国絵図、郷帳に加え、城絵図、道帳の提出が求められた。諸大名にとって最高の軍事機密である城絵図の徴収は幕府権力の強化につながり、作成にあたってはきめ細かな作成基準が示された。「正保城絵図」には、石垣や堀の高さ（深さ）や長さなどの情報が詳細に注記されており、城の本質は土木にあることを示している。当時の幕府との力関係から、各藩は忠実に法令を守って城絵図を作成・提出し、幕府の御文庫である紅葉山文庫に収納された。近世築城の完成期に、幕府の権威が最も高まった時期に諸藩に製作させた地図の原本であるから内容の正当性・信憑性は極めて高いとされる。

正保城絵図の一つ、「出雲国松江城絵図」は、正保 2 年（1645）に松平直政から幕府に提出されたものである。城郭内に描かれた天守図は現在の松江城天守とは外観が異なり、他にも「水手門」など、現在の松江城郭施設とは異なる描写もあるが、近年、初期松江城天守の研究が進む中で、天守はむし

ろ当時の実態を描いているとの理解が出来るようになってきた。であれば、「水の手門」も実態を描いて幕府に提出したものではないかと、私は思い始めるようになってきた。

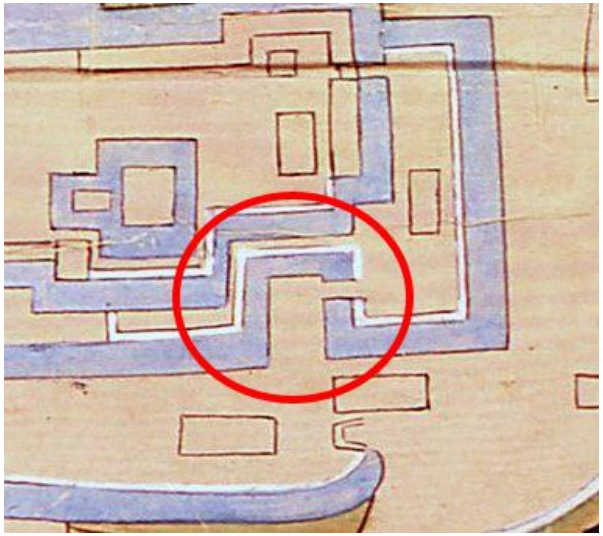
2. 松江城郭絵図に描かれた「水の手門」と石垣修理

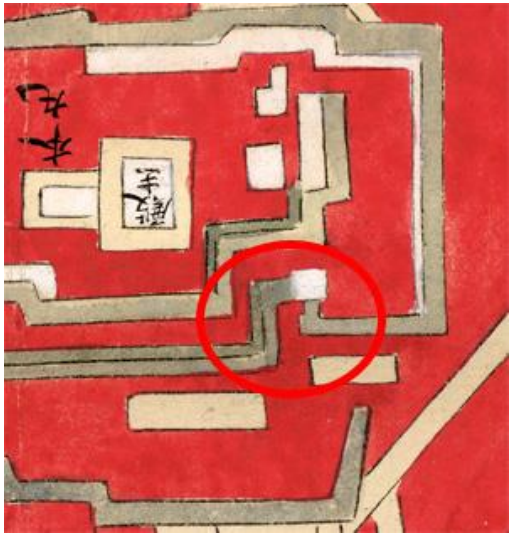
2-1.絵図に描かれた「水の手門」の変遷

そこで、現存する城下町絵図、城郭（石垣）修理願図などの松江城郭絵図から、「水の手門」部分を抜き出し、製作年代の古い順に並べてみた【図 1-1～14】。並べてみると、【図 1-1】堀尾期松江城下町絵図（寛永 5～10 年〔1628～1633〕）では石垣や塀は描かれるが門らしき建物は描かれていない（【図 1-2】寛永年間松江城家敷町之図は【図 1-1】を基に作成されたと考えられるが水の手門の形状は分かりづらい）。松江藩家老家に伝わり正保城絵図の控図と考えられる【図 1-4】松江城正保年間絵図（正保年間〔1644～1648〕）、幕府に提出された石垣修理願図（控）である【図 1-5】出雲国松江城之絵図（延宝 2 年〔1674〕）では、【図 1-3】出雲国松江城絵図（正保城絵図）（正保 2 年〔1645〕）と同様な形状に門を描いている。ちなみに、【図 1-3】には、城内三ノ門付近に現実にはあり得ない門が描かれたり、石垣の長さの明らかな写し間違いなどが見受けられるが、幸い、より実態に即していると思われる【図 1-4】と照合することで、補正が可能である。

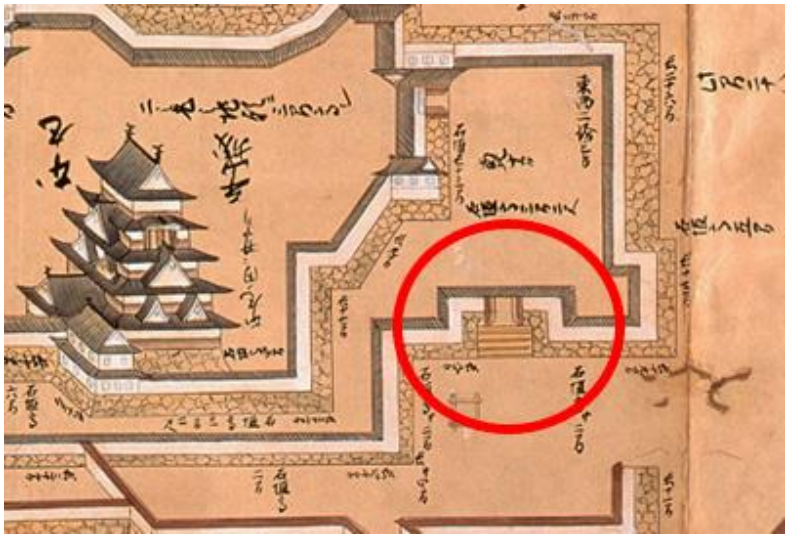
一方、【図 1-6】松江城及城下古図（天和 3～元禄 5 年〔1683～1692〕）や【図 1-7】御本丸二ノ御丸三の丸共三枚之内（寛文 11～元禄 7 年〔1671～1694〕）以降の絵図に描かれた「水の手門」は現在の姿に近い。絵図に描かれた「水の手門」の変遷が正しいとすれば、少なくとも、寛永 10 年（1633）頃から正保 2 年（1645）までの間、延宝 2 年（1674）から元禄 5 年（1692）頃までの間の 2 度ほど、「水の手門」は石垣の改築を伴う改造が行われていたことになる。

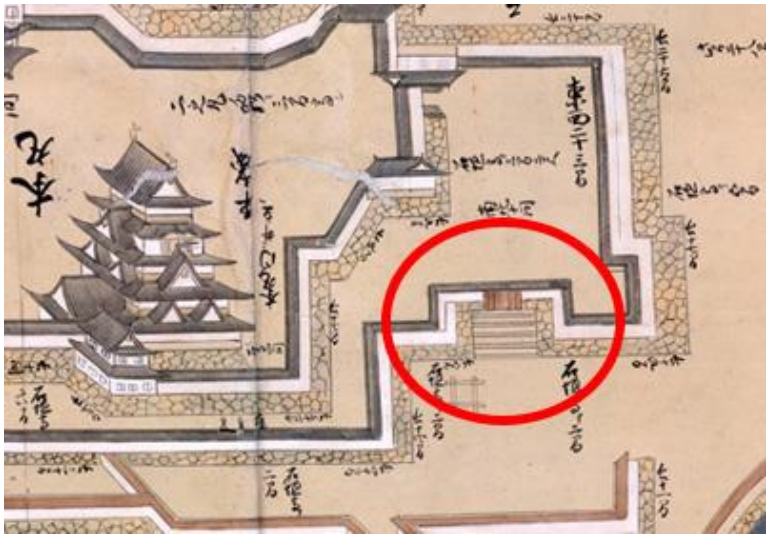
【図 1-1～14】松江城下町絵図、城郭(石垣)修補願図などに描かれた「水の手門」（赤〇が水の手門）





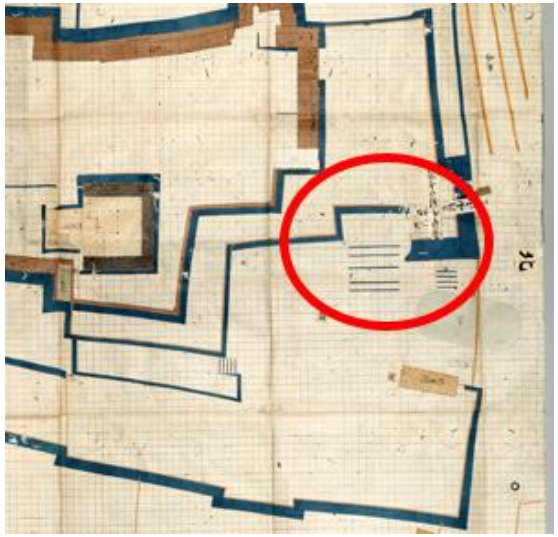
【図 1-1】堀尾期松江城下町絵図（島根大学附属図書館蔵）、【図 1-2】寛永年間松江城家敷町之図（丸亀市立資料館蔵）

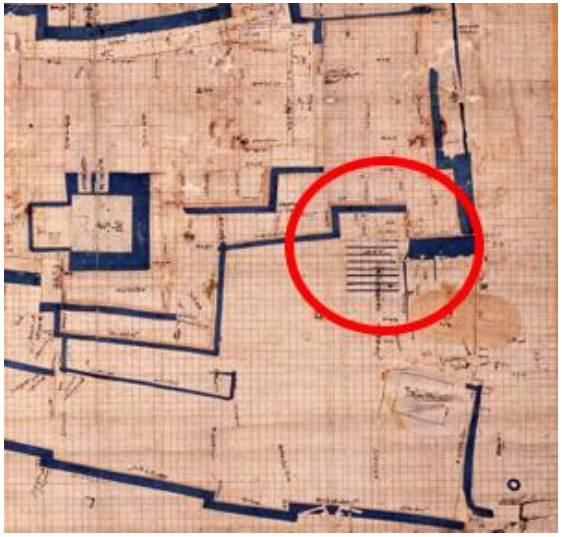




【図 1-3】出雲国松江城絵図（国立公文書館蔵〔内閣文庫〕〔重要文化財〕）、【図 1-4】松江城正保年間絵図（乙部正人家蔵）

【図 1-5】出雲国松江城之絵図（松江歴史館蔵）、【図 1-6】松江城及城下古図（三谷健司家蔵）





【図 1-7】御本丸二ノ御丸三の丸共三枚之内（国文学研究資料館蔵）、【図 1-8】松江城縄張図（松江歴史館蔵〔松江市指定文化財〕

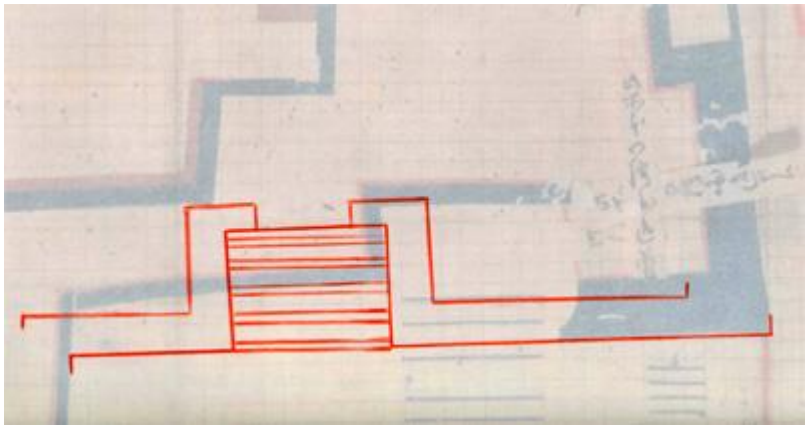
【図 1-9】出雲御本丸（島根県立古代出雲歴史博物館蔵）、【図 1-10】松江城郭図（松江歴史館蔵）

【図 1-11】松江城下絵図（島根県立図書館蔵）、【図 1-12】出雲国松江城（諸国城郭修復図）（東京大学史料編纂所蔵）

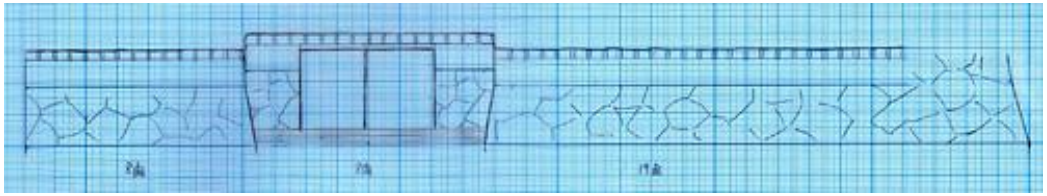
【図 1-13】松江城郭古図（松江歴史館蔵）、【図 1-14】出雲国松江本城図（国立公文書館蔵）

2-2.絵図の比較から見た「水の手門」の改造

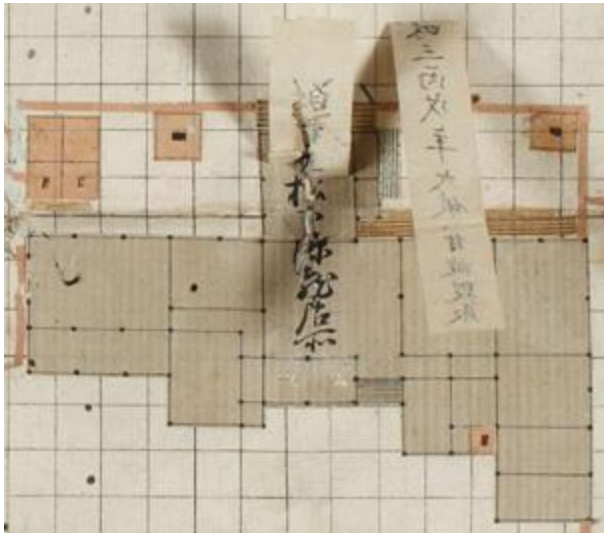
前述のように、【図 1-3】と、【図 1-4】には石垣の高さや長さなどの情報が注記されている。注記によれば、「水の手門」を正面に石垣の高さは 2 間（3.64m、1 間=1.82m で計算）、正面向かって右側石垣長は 19 間（34.58m）、左側石垣長は 8 間（14.56m）、絵図から正面石段長（幅）は約 8 間（14.56m）である。塀や石段、門などの高さ長さは記されてはいないが、概略図を作成し、現在の姿に近く年代も古い【図 1-7】と重ねてみた【図 2-1】。



【図 2-1】「水の手門」の比較概略図（【図 1-7】に【図 1-4】描かれた「水の手門」（朱書）を重ねたもの）



【図 2-2】「水の手門」想像概略図（【図 1-4】に記された石垣の長さ・高さより、塀・門等の建物は絵図より想定）



【図 1-7】は、石垣や城郭建物などの構築物の位置や大きさを示した実測図である。全体に縦横に一間隔の方眼線を引き、ここに石垣や建物の大きさの紙を貼り付けている。大手門の正面にある建物（天守鍵預）と記す貼紙があり、建物の間取りの上に「松下源蔵居所」と記されている【写真 3】。松下源蔵は寛文 11 年（1671）から元禄 7 年（1694）に亡くなるまで「天守鍵預」を勤めているので、本図の製作年代をその間とみなすことができる。概略図ではあるが【図 2-1、2】を見ると、予想以上に、【図 1-3】【図 1-4】【図 1-5】に描かれている「水の手門」の姿と配置は、現在と異なるのである。

【写真 3】図 1-7 部分、建物に記された「松下源蔵居所」

ちなみに、【図 1-3】及び【図 1-4】に記された全ての石垣の長さを、【図 1-7】に丹念に当てはめてみた。絵図と実測図の違いがあるので表現が合わないところもあるが、「水の手門」の周囲の石垣の長さの違いが際立っており、このことからも、【図 1-3】や【図 1-4】【図 1-5】に描かれた「水の手門」の姿は、当時の実態を描いたものである可能性が高く、【図 1-7】が製作されるまでの間に大きな改造があったと思うようになった。

2-3.石垣修理の履歴

よく知られるように、江戸幕府が諸大名の統制のために制定した基本法「武家諸法度」には、城郭修理の許可制度について規定がある。城郭修理願に際し、必要書類として絵図が添付されるようになり、藩側には控図が残ることになった。

松江城郭絵図の変遷より、延宝 2 年（1674）から元禄 5 年（1692）頃の間に「水の手門」の大きな改造が行われたと思うようになったのだが、【図 1-3】に描かれた「水の手門」が現在の姿になるために、この間に松江藩から幕府に提出されたであろう石垣修理願図は今のところ見つかっていない。

しかし、【表 1：松江城・石垣修理の履歴】を見ると、17 世紀末以降は石垣が頻繁に崩れ、幕府に届けて石垣修理は繰り返し行われている。【図 1-3】に記された城郭の姿は、繰り返された修理以前の姿である可能性をもう一度考えていく必要がありそうである。

3. 松江城石垣研究第一人者による「水の手門」の現地調査・検討会

以上のことを思いめぐらしている中で、かつての「水の手門」の痕跡や存在の可能性を、現在残る石垣から見つけていくことが出来ないかと、あらためて思った。

令和 4 年 10 月 10 日（月祝）、松江城の石垣研究の第一人者である乗岡実氏、岡崎雄二郎氏、飯塚康行氏の御快諾をいただき、オブザーバの西尾克己氏、木下誠氏とともに、水の手門の不思議を解決すべく、調査に臨んでいただいたのである【写真 4】。3 名の方にお願いしたことは、“出雲国松江城絵図（正保城絵図）【図 1-3】に描かれた「水の手門」は石垣修理を経ると現在の姿になるのか、その痕跡と可能性を探っていただきたい”、ということだった。【図 1-3】に描かれた「水の手門」は現実にはあり得ない姿という結論であれば、なぜ、あの時代、松江藩（藩主松平直政）は幕府に対して、いずれ問題になるような絵図を作成し提出したのか、という新たな疑問も生じてくる。

前夜から続いた雨も上がり、説明を終えると参加者の皆さんには課題をすぐに共有していただいた。約 1 時間半に及ぶ現地調査と検討会での結論から言えば、【図 1-3】に描かれた「水の手門」の姿を、今日のような姿に改造した可能性は充分考えられる、ということだった。年代を特定することは難しいものの、表面観察やこれまでの発掘調査の成果から、現在の水の手門周辺は堀尾氏が築いた石垣を何度も改修しているように見受けられるという。【図 2-1、2】で示した、【図 1-3、4、7】との比較（水の手門の位置の違い）も新知見であった。

しかし、水の手門前から腰曲輪までの高低差や石垣の高さなども気にかかり、最終的な結論は発掘調査による石垣、石段などの痕跡から導く必要がありそうだ。今後（現役の職員）に託された宿題と確認したところで検討会は終わった。

【写真 4】「水の手門」の現地調査・検討会（2022 年 10 月 10 日）

おわりに

正保城絵図の一つ、出雲国松江城絵図（正保城絵図）【図 1-3】の検討を進める中で、初期松江城天守の姿と同様に、現在とは異なる「水の手門」も当時の実態を描いて幕府に提出したものではないかと、思い始めるようになった。松江城郭絵図の変遷と比較によれば、「水の手門」は 17 世紀の後半に大きな改造があったことを示している。現在の石垣にその痕跡を見つけることが出来るのか、松江城石垣研究第一人者の皆さんにお集まりいただき、現地調査・検討会を行った。結論は、今日のような姿に改造した可能性は充分考えられる、ということだったが、最終的には発掘調査の成果を待たなくてはならない。

いつの日か、後輩の皆さんのご尽力により、“水の手門の不思議”が解き明かされることを心より期待している。

（松江城・史料調査課副主任行政専門員／稲田信／2022 年 10 月 11 日記、11 月 17 日公開）